

観能の夕べ

(石川県立能楽堂)

平成二十八年七月三十日(土曜日) 午後六時三十分開演

演目解説 (石川工業高等専門学校准教授 佐々木 香織)

狂言 伊文字 (いもじ)

「伊」の文字の付いた国の名、「伊」の文字の付いた里の名を、あなたはいくつ挙げられますか。清水の観音に申し妻をして得られた女が、和歌で住所を答えて去りましたが、詠み込まれた国・里の頭文字が「伊」であったことしか、主人も太郎冠者も思い出せません。そこで歌関を立て、通りかかった人をつかまえて、歌の下の句を継がせます。急ぎの用がある通行人には迷惑なことです。が、謡がかりで言い当てる、仲人役が果たせました。

能 忠度 (ただのり)

かつて俊成に仕え俊成没後に出家した僧の一行(ワキ・ワキツレ)が、西国行脚の途中須磨の浦で年老いた山賤やまがっ(前シテ)に出会います。老人は山陰のひと木の桜を墓標として花を手向けています。日が暮れて僧が宿を借りようとすると、老人は「行き暮れて」の歌を詠んだ人がこの花陰に眠っているといい花の主あるじを弔うよう勧めます。歌を詠んだのは薩摩守忠度と気づいた僧に、老人は夢の告げを待てと頼んで消えます(中入)。僧は弔うよりも都に帰り定家に報告することを思いますが、旅寝の夢に現れた忠度の魂魄(後シテ)も都への言づてを頼みます。それは俊成が撰進した千載集に忠度作の一首が入りながら、勅勘の身の上ゆえに詠み人知らずとされたことへの執着からでした。そして忠度の辞世「行き暮れて」の歌がどういう状況で最期に発見されたかを、一ノ谷の合戦を再現する中で明らかにします。今度こそ定家が作者を忠度と明記して後世に伝えてくれるでしょうか。(金沢大学人間社会研究域教授 西村 聡)

装束附 前シテ(老翁) 尉髪をつけ、三光尉又は朝倉尉の面をかける。

後シテ(平忠度) 黒垂をつけ、梨子打烏帽子をいただき、中将又は今若の面をかけ、白鉢巻をしめる。